次代の超大国インドを考える5冊

【評者】
岐阜女子大学
特別客員准教授
笠井亮平

①これからのインド
——変貌する現代世界とモディ政権
堀本武功、村山真弓、三輪博樹・編
東京大学出版会、2021 年

②新興大国インドの行動原理
——独自リアリズム外交のゆくえ
伊藤融・著
慶應義塾大学出版会、2020 年

③マハーバーラタ入門
——インド神話の世界
沖田瑞穂・著
勉誠出版、2019 年

④第三の大国 インドの思考
——激突する「一帯一路」と「インド太平洋」
笠井亮平・著
文春新書、2023 年

⑤新インド入門
——生活と統計からのアプローチ
田中洋二郎・著
白水社、2019 年

この一年、インドの「台頭」を実感させる出来事が相次いだ。二〇二二年のGDPはイギリスを抜いて世界第五位となり、GDPの成長率は中国を上回る六・七%を記録した。人口では二三年に中国を抜いて世界第一位になることが確実になっている。二二年一二月にはG20議長国に就任し、「グローバル・サウス」の旗手としての役割を積極的にアピールしている。

その一方で、インドには「わかりにくさ」がつきまとう。その最たる例は、ロシアのウクライナ侵攻をめぐる対応だろう。国連安保理や総会でのロシア非難決議案の採決でインドは「棄

権」の立場を貫いている。日米豪とともに「クアッド」を形成するインドが、なぜロシアをめぐっては中立なのか。中国との関係でも、国境問題をめぐり死者を出すほどの衝突が発生する一方で、インドは上海協力機構の正式加盟国であるほか、BRICSやRIC（ロ印中）の枠組みを維持している。インドの真意はどこにあるのか。

①はこうしたインドについて、二〇一〇年代以降に焦点を定め、第一線で活躍する日印の研究者が内政や外交、経済、社会の各分野について論考を寄せている。巻末にはインド情報の収集方法に関する解説と文献案内もあり、本書をベースとしてさらに理解を深めたい読者にとっても有用だ。

②は、インドがいかなるロジックに基づいて外交・安全保障政策を展開しているかを多面的に分析した書である。なかでも興味深いのは、著者が以前から注目してきた「アルタ的現実主義」についての論考だ。古代インド・マウリヤ帝国の宰相カウティリヤの書とされる『実利論（アルタシャーストラ）』に基づくもので、現代のインド外交にも合致するマンダラ的な世界観や実利優先の思考があるとの議論が展開されている。

インドの戦略文化やインド人のマインドを理解する上では、叙事詩『マハーバーラタ』を外すわけにはいかない。③は、世界最長と言われる一大叙事詩の内容や登場人物、背景を平易に解説したものである。本誌前号で紹介されたので、ここでの五冊には加えなかったが、インド現職外相S・ジャイシャンカル氏の『インド外交の流儀』（白水社、二〇二二年）では、「マハーバーラタ外交論」とも言うべき論考に一章が割かれている。

インドの大国化を、中国の「一帯一路」と日米が推進する「自由で開かれたインド太平洋」のせめぎあいの中でどう捉えるかという問題設定の下で解き明かそうとしたのが、④の拙著である。独自の行動が目立つインドは、日米中ロをはじめ、世界にいかなるインパクトを及ぼすのか。その思考について、過去と現在から分析を試みている。

インドは台頭著しいが、ではその「中身」はどうなのか。実はこれが難しい。「発展」「成長」というアプローチで捉えるか、「貧困」「格差」というアプローチで捉えるかによって、浮かび上がるインド像は大きく異なってくる。⑤はインドに留学し、現地駐在経験もある著者が、自身の体験に加えて豊富なデータに基づきこの巨大国家の実態に迫ろうとしたものである。これまでの認識を裏付けるものもあれば、インドの意外な一面を知らされるものもあり、興味がつきない一冊だ。●